

杉野要吉著『ある批評家の肖像』

平野謙の〈戦中・戦後〉

平岡敏夫

1 著者への手紙

杉野さん、いま六〇〇余ページの『ある批評家の肖像』平野謙の〈戦中と戦後〉を拝読しおりました。一日中読みつづけることもあれば、半日、あるいは二、三時間というときもありました。この大冊、斜め読みなどを許さず、逆に、いつでも読みはじめると、もう、とりこになったように引きつけられて、本から離れることの出来ない、そういうおそろしい、凄く魅力を持っています。

読みながら、感銘したところ、大事と思うところ、注意すべきところに、紙片を貼っていったのですが、読後に数えてみると、七〇枚近くになっていました。その一片一片に杉野さんの渾身の論理が込められているのです。それをひとつひとつ列挙すれば、何枚も書かなくてはならないでしょう。いくつかの例をあげてみます。まず、「序に代えて」平野謙における戦中・戦後の問題」から一節を引きます。

……私は平野さんが亡くなってからそれを待つてはじめて平野

謙について書きはじめたというわけではありません。また私は「死者に鞭打つ」ために平野謙論をやっているわけではありません。もし私の論がただたんに平野さんの弱点をあげるとか、批判のための批判などであるのなら、私にとつて平野謙論はなんの意味もない。すくなくともそんなことでこの一〇年を棒に振るほど愚かな平野謙論をいまやっているつもりはありません。私はなによりも一人の学徒として、「文学史」研究のために、触発力ある取り組みがいのある文学者として平野謙に取り組んでいるつもりです。

(初出、'88・5・7 田山花袋研究会第21回大会講演・「田山花袋研究会々誌」8号、'90・3所載)

右の一節に十数年の歳月をかけた杉野さんのこの本の立場が明瞭にうかがわれます。私は読了のいま、思い起こしてみても、杉野さんの論理とその展開に一度も異和感を持つということがなかったと言えます。

中山和子氏のみならず、本多秋五氏、小田切秀雄氏も含めて、杉野さんは自身の論理に少しでも外れる言があれば、妥協せず、追求して行く——つまり大小を問わず「論敵」の存在が、このポレミックの形の批評を推し進めたというのでありますが、何と云っても杉野さんの誠実無比の精神と強靱な論理があつたればこそです。門下の人や友人たちの「同情」は、平野謙それ自体の存在をつまらなくしてしまうおそれがあるわけで、「心の傷」を抱きつづけ、「自己弾劾」をしつづけてきたドラマこそ平野謙のものであり、昭和文学史のものであります。

第一部「問題の所在、論争への出発」の第一章「戦時下の芸術的抵抗はあったのか」において、杉野さんは「私の考えをいえば、この『わが戦後文学史』でみても、平野謙は、亀井勝一郎や伊藤整の戦時下についてはその手傷や汚点にかかわる資料を適宜しめしながら実証的にえがきだし、その位相把握を彼らしくリアリストイックに実行しているのに、それに対応する戦時下のおのれの過去についてはそれをリアリストイックに語っていないという疑問をぬぐいきれないということである。」と書き、自己の転向や汚点についてほめかきはあるものの、自分は無名だったから罪少なきものだったとする戦時下の平野謙の自己評価の妥当性についても疑問があると述べています。

小林秀雄が時局から身を切断、対峙させ、時流から隔絶した「無常といふ事」の世界を開花させてゆくのを杉野さんはひとつの「芸術的抵抗」と呼ぶことのできる作品と評価しています。しかし当時の平野謙はそういう小林秀雄が不満だった。そこに先行者小林秀雄と当時の新進批評家でかつ情報局嘱託官吏たる平野謙との戦争状況の認識のずれを見出して、杉野さんは次のように書いています。

……「大東亜戦争」下の彼の姿勢に正確に対応する発言として、全集未収録文の一つ「文学報国会の結成」(婦人朝日)一九四二・八が、まさに彼が論証した亀井勝一郎や伊藤整などの戦争下の「汚点」にそのままみあうような類似した発言としてついに書かれるにいたるのである。そこには「社団法人『日本文学報国会』がいよいよ生誕し、さる六月十八日力強い発足の

第一歩を踏み出した」にはじまり、「その歩武堂々たる出発を広く中外に宣明」、「会長徳富蘇峰、全会員約三千二百名、まことに聖代の壮観と言ふべきであらう。」この一事は既にそれだけ永く文学史上に伝ふべき偉大なる事業」とまで書きしるしている。

(78・6・10 初稿、02・1・25完成稿)
ここに本書の出発点、平野謙論のドラマのはじまりがあります。第二章の「平野謙論・序説」をはさんで、第三章・第四章が「論争への出発」となり、右に引いた第一章を受け継いでゆくものですが、紅野敏郎氏や中山和子氏の戦時下の平野謙擁護の言説を批判しつつ、杉野さんはこう書いています。

なぜそのことに私はこだわり、それを強調するか。それは平野謙自身における保身的弁明があるばかりで、戦後ながく「隠蔽」され、また誰によつても具体的にとりあげられることがないままです。また誰によつても集約的に存在するからである。戦後の歴史のなかでくりかえし用いられ、使い古されてきたことばであるが、平野謙におけるいわゆる「戦争責任」の問題が、しかもながく平野自身において意識的に伏せられ、暗部に葬られてきた問題としてそこにあるからだ。

(第一部第三章論争への出発へその1)
この本の「出発」について、つかかなり長く引用してしまいましたが、やはり、ここがまずこの本にとってかんじんなどころではないかと私は思っているからです。

2 著者への手紙(続き)

所用で中断しましたが、続けます。第二部の「情報局時代をどうとらえるか」は、七章にもわたっており、この本の圧巻と思われました。情報局入局について、井上司朗課長を何度も訪問して、ついに採用をかちとるところ、思わず嘆息しました。平野謙はまる十年がかりで大学を卒業、卒業後もお一年間、毎月送金してもらっており、そのとき三三歳。中山和子氏の調査では、一九四一年二月二日付で情報局嘱託となるや、郷里の父へ電報で知らせ、「月手当百円ヲ給ス」の辞令をすぐ郵便で父宛に送っています。「マトモな職業」の「一人前の勤め人」になった平野謙のよろこびがいかに大きなものだったか、杉野さん同様私にもよくわかります。

ところが、戦後、平野謙が情報局をふりかえった文章では、あえて入局させてくれた「恩人」の井上司朗(歌人逗子八郎)をお人好しの、まったく無能力な人物として、一貫してやや小馬鹿にしたような書きかたで描いておられます。情報局時代の確実な資料提供の井上の申出を無視し、戦争讃美の恥部を隠し通そうとした平野謙に対し、ついに井上は「忘恩の徒、平野謙を弔う」を発表するに到るところ、おどろくばかりです。情報局第五部第三課へ就職依頼に何度もやってきたという井上証言について、中山和子氏が「その時平野謙がなめたにちがいない『みじめさ』の一例」の証明とみたことに対し、杉野さんは、熱心に足を運び、頼みこむことで井上の心を動かし、定員枠一名増を認めさせ、嘱託採用を

わがものとなしえた平野謙のねばり強い執念に感服するばかりと書き、「みじめさ」を味わう意識に支配されるなどはなかったとして、「知識人」を別格視することなく、市民だれしもさまざまな場面で辛い身あがきをして生きていると記しているところ、深く共感しました。

「身は売っても芸は売らぬ」という最低綱領を自分に課したという平野謙の弁明をそのまま受け入れるのではなく、「身を売った」平野謙は「芸をも売らざるをえなかった」というべきだとしても杉野さんは、そうした二元論的視点を斥けつつ、情報局へ入ることで自己自立の拠点を獲得して行った平野謙の戦時下の活動を追求しております。しかし、この本のドラマは以上のようなところにあるというだけでなく、さらに、第三部「戦況の逆転と『転向』、そして『敗戦』への道」にこそあり、第二部に加えてやはり圧巻と言うしかありません。五章にわたっていますが、武者小路実篤の文章を掲載した「都新聞」に対し、「もしもし、情報局ですが、昨日の武者小路さんのような原稿を出してもらうと困るんですが」という電話をかけてきた若い人とはだれか(三七七頁)。興味しんしんたるものがあります。平野謙が戦況不利とみるや、杉森久英に近づき、中央公論入社を果たしたのは一九四三年(昭18)五月ごろのようですが、杉野さんは、平野謙が戦争状況の変転による戦時批評家としての自己の文学観の瓦解、そこからひそかな「転向」劇を演じたと言っています。そして、情報局退職後の自己の転身への明確な第一声たる「青春の文学」(43・6「新潮」)を、平野謙が戦時下に書き残した最もすぐれた

批評作品と評しているのには感服しました。

第四部「ある批評家の肖像」は二章から成っていますが、これまた庄巻と呼びたくなります。結論にあたるとは思いますが、その一節を引きます。

……このように彼がはげしく弾劾する藤村像を、消し去りたい戦時期の「罪過」をになう、平野謙の裏返された「自己弾劾」の自画像とみなすことができるなら、後年の批評で手きびしく弾劾し、映し出してくる高見順、亀井勝一郎、伊藤整らの像もまた、その奥深い内部意識においては、平野謙がこれら同時代文学者らの「弾劾」に仮託し屈折的におこなっていた「自己弾劾」批評であった可能性があるわけである。

(第四部第一章「新生」論の主題と「芸術と美生活」批評理論の生成) こうした「心の傷」「自己弾劾」ゆえに可能となった、他の「近代文学」同人たちとも異なる平野謙の昭和文学史におけるゆ

新刊紹介

杉野要吉著

『わが「文学史」講義

——近代・人間・自然——』

二〇〇一年度前期に行われた近代文学史の講義を収めた「一つの小さい記録」であ

るぎない仕事を高く評価されるどころ、感銘のほかはありません。ただ、戦時中の平野謙のような行為、さらには皇国の勝敗をかけて天皇に殉じようとした少国民も含めた国民の行為の評価の問題は残るかも知れません。小田切秀雄氏の軍隊逃れを、戦場に赴いて草むす屍となった国民を思い浮かべて全肯定できないはずという意味のことを、杉野さんは述べておられましたが、まったく同感です。

書き継いで書き継いで(戦中・戦後)の文学を確乎として描き出された杉野さんの営為、庄巻につぐ庄巻のこの本、よくぞ書きつづけ、よくぞ大冊にまとめあげて刊行された、と心からの喜びを覚えてなりません。御高著について、書き切れない、言い切れない、いっぱい抱いておりますことを書き添えて、読後直ちに御礼を認めた次第です。また拝眉の折に。

(二〇〇三年二月 勉誠出版 A5判 六一四頁・索引一九頁 一六〇〇円)

る。二十一世紀最初の年に行われた講義は二十世紀最初の年、一九〇一年の文学状況を振り返ることから始まり、「自然」とそれを対立する「文明」「人間」「機械」という二十世紀の問題が提示される。そして柳

田国男、国木田独歩、田山花袋、夏目漱石、有島武郎、小林多喜二、堀辰雄という二十世紀前半に活躍した文学者たちがそれぞれ持った「自然」の問題の系脈を明らかにしていく。「あとがき」では、講義終了

後の二〇〇一年九月十一日の事件をきっかけに起こった、現在の「自然」の問題が論じられる。

全篇、変換期である現在において新たなビジョンを得るためには、元号主義を乗りこえる新たな歴史観による歴史把握が必要であるという著者の大きな問題意識によって貫かれている。

(二〇〇三年九月 武蔵野書院 A5判 三三三頁 六〇〇〇円) [工藤智哉]